

3歳未満児の描画を通じた保育カンファレンス（Ⅰ）

－「五感を通じた経験を吸収した身体運動の軌跡」をめぐって－

大須賀 隆 子*

Conference of Care Nursery Teachers with Drawings by Children under 3-Years-Olds (I) : about “Tracks of Body Exercise Arised from Children’s Experiences using Five Senses”

OSUGA Takako

Abstract

This paper aims to inquire the care and education toward children under 3-years-olds by observing the conference with their drawings. On the whole, children under 3-years-olds draw their experiences using their five senses, while their teachers talk about their growth of bodily natures seeing their drawings. The three concrete conclusions are derived from the conference. (1) Scribbled drawings by infants express purely their bodies’ exercises. For the first time in their lives, they use tools (paintbrushes and papers) and scribble. At first they only scribble, and gradually they start to see their scribble. This is the start of education and creation. (2) In a 1-year-old child’s drawing, a care nursery teacher can see the sense of self and other. The care nursery teacher and the child would have their complementary relationship through their mutual bodily natures. (3) The bottom line of care and education is formed by the whole relationship of teacher and child in mind and body. The children’s drawings lead to this conclusion.

Keywords: Drawings of Children under 3-Years-Olds, Experience using Five Senses, Growth of Bodily Nature, Day Nursery for under 3-Years-Olds, Conference in Early Childhood Education and Care

1. 問題と目的

1) 3歳未満児保育における「教育」と「保育の質」

2008年、保育所保育のガイドラインである「保育所保育指針」が厚生労働大臣による「告示」¹となった。告示化された「保育所保育指針」の「第3章 保育の内容」には、「実際の保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意することが必要である」と「養護と教育の一体」が強調されている。そのうえで、「教育」とは「子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助」であると「教育」の定義が明確に述べられている。

2009年、厚労省雇用均等・児童家庭局保育課の調査結果によると²、保育所定員は2008年4月より1万1千人増加し2009年4月には213万2千人になったにもかかわらず、保育所待機児童数は2年続けて増加し、2009年4月は5千834人増加し2万5千384人となった。そのうち3歳未満児の保育所利用の割合は21.7%で、2008年4月

キーワード：3歳未満児の描画、五感を通じた体験、身体性の育ち、3歳未満児保育、保育カンファレンス

*平成21年度生 人間発達科学専攻 保育・児童学領域

の21.0%より0.7%増加したと報告されている。このように3歳未満児保育所保育の利用率は高まりを見せている。それでは、未満児保育所保育における「教育」には、何が求められ、どのような援助が望ましいのだろうか。

3歳未満児保育に関する先行研究を概観すると、1995年に諏訪ら³が「3歳未満児の『保育の質』に関する研究」に取り組んでおり、今日の保育所保育の状況に対しても示唆に富んだ研究結果が示されている。諏訪らは3歳未満児の「保育の質」が最も顕著に現われるのが「保育者と子どもの関係」であると捉え、保育者自身の「よい保育」についてのイメージに関するアンケート調査を行った。その結果、保育者の「よい保育」イメージの構成要素は、(1)保育者同士の関係(2)保育者の保育姿勢(子どもへの向かい方)(3)保育のあり方(内容・方法)(4)子どもの姿(5)親との関係(6)保育環境・条件、の6柱から成り立っていることが示された。さらに、保育者の「よい保育」イメージが集約的に表わされたのは、(2)保育者の保育姿勢(子どもへの向かい方)であると指摘している。その具体的な姿勢とは、①一人一人をていねいに、②思いをゆったり受容する、③その場の適切な働きかけ、④楽しそうに共感する、⑤心の拠り所になる、である。

2) 3歳未満児の「保育の質」を高める「保育カンファレンス」

森上⁴は、1980年代に、保育現場で行われていた話し合いをいち早く「保育カンファレンス」という言葉で捉え直した。カンファレンスは、元々、医療現場において特定のクライアントをめぐる多くの専門家による協議を意味する。それが保育現場に適用される場合は、個人だけではなく、保育者と児童、児童と児童、といった関係的視点が重視される。

3歳未満児を担当する保育者が、一人一人の子どもをていねいに受けとめ、思いをゆったり受容し、適切な働きかけをし、共感し、心の拠り所に成るには、一朝一夕には成らず日々の「自己研鑽」や「省察」が問われるのではないだろうか。

浜口⁵は、保育者の「省察」の過程を(1)実践、(2)想起、(3)記録の記述(言語化)、(4)解釈、(5)再び実践へ、という5つ段階として捉えた。そして、各過程を実践→想起→記録の記述→解釈→再実践という「循環」で捉えている。保育者がそれぞれの過程において気づく問題と留意事項が「具体的保育実践」に基づいて行われる省察のことを、浜口は「反省的方法」と名づけた。

津守⁶も、保育者の重要な資質として「省察」をあげている。津守によると、保育実践の最中には、保育者は直感や身体的レベルで子どもの世界を理解しているという。1日の保育が終わった時点で、自分の保育を振り返り、追体験し、記録を取ることによって、自分の理解の不十分さや実践中には気づけなかった行為や出来事の意味を見出し、今までの理解を変えたり深めたりするに至るという。

保育者個々の「省察」を促し、保育者集団のなかで「反省的方法」が共有され展開し循環するための契機のひとつとして「保育カンファレンス」が有効ではないだろうか。浜口は、省察が真の意味で実践に生かされていくためには、「具体的保育実践」に基づいて行われる必要があると論じている。

3) 3歳未満児保育における「具体的保育実践」としての描画活動

3歳未満児は、「聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚」を通して世界を体験し始めたばかりである。そして、3歳未満児は、自らの体験を表現することばをまだ十分にはもたない。

安斎⁷は、0歳児、1歳児、2歳児の保育所保育を詳細に観察し、ワロンの心理学理論を織り込みながら、描画活動もそのひとつである遊びや生活のなかで、未満児がこの世界をどのように体験しているかを描き出している。安斎は⁸、描画は「その子が見、聞き、嗅ぎ、味わい、触れるといった一経験のすべてを吸収した身体が、紙の上に残していく身体運動の軌跡」とであると論じている。

0歳児保育から自由画を取り入れている保育園がある(以下、A保育園とする)。A保育園は、200X年より現在に至るまで1ヵ月に1回、保育者全員が一堂に会して、全園児の自由画を見ながら遊びや生活の様子を語り合う「絵を見る会」を実施してきた。津守⁹は、保育実践の最中には保育者は直感や身体的レベルで子どもの世界を理解していると述べている。そうした保育実践中の直感と身体的レベルでの保育者の理解が、3歳未満児の「五感のすべてを通した体験を吸収した身体運動の軌跡」としての描画を通して、つまり保育者と子どもの「具体的実践」をめぐる、保育者にどのような「想起」や「語り」や「解釈」を引き起こすのであろうか。

A保育園の「絵を見る会」は、事例やビデオ映像記録ではなく、乳幼児の描画を通して語りあう「保育カンファ

レンス」である。本研究は、3歳未満児の描画を通じた保育カンファレンスに参与観察し、その記録を考察することを通して、3歳未満児保育の「養護と教育」や「発達の援助」のあり方、「保育の質」の高め方について論考するものである。

2. 方法

1) 対象園

対象とするA保育園は、在籍児数が60名、3歳未満児クラスが3クラス、3歳以上児クラスが3クラス、園長・副園長・保育士14名・調理師2名の園である。

A保育園の園長は、70歳代である。青年期に自宅が保育園（以下、B保育園とする）を兼ねていたこともあって乳幼児の遊びや生活を目の当たりにしながら成長した。その後、大学教員として教育と保育者養成に携わり、現在は保育園園長として副園長（60歳代）と共に乳幼児保育に取り組んでいる。

「絵を見る会」のスーパーバイザー（以下、SVとする）は、70歳代である。SVは、1950年代よりB保育園の保母として実践を重ねており、特に自由画の実践については指導者として表彰をされたこともある¹⁰。

C保育士は、50歳代である。1970年代後半からB保育園の保母として、当時は保母であったSVと共に実践を重ねてきた。2000年代に入ってからA保育園の保育士として勤務している。D保育士は、40歳代である。G保育士は、20歳代である。

A保育園では、描画活動の準備は絵の具を作るところから始める。顔料を練り、アラビアゴムを入れ、艶出しを入れて、一色一色を全て保育者が作る¹¹。筆は、16号くらいの平筆、丸筆を用意する。紙は、四ツ切（25.5×30.5cm）が基本である。

なお、A保育園の「絵を見る会」における描画は、乳幼児が描きたいことを描きたいように描いた絵ということから自由画と同義とする¹²。

2) 記録と分析の方法

筆者は、201X年10月-201X+1年2月の間に、A保育園の「絵を見る会」が行われる日に6回訪問した。滞在時間はいずれの回も14時-20時半である。そのうち2回は、保育者養成課程の4年生の学生とともに訪れた。

201X年10月・11月・12月、A保育園で行われた「絵を見る会」を筆記とビデオカメラによって記録をした。筆記記録とビデオ映像を、研究協力者（保育者養成課程4年生2名、うち1名はA保育園に参与観察した）と繰り返し読む（観る）ことを通して、3歳未満児保育の「養護と教育」や「発達の援助」のあり方、そして「保育の質」の高め方について、筆者と研究協力者の2名が着目した場面を取り出して考察した。

3. 結果と考察

描く場所は、保育室の片隅や廊下に設けられている。写真1は2歳児の保育室廊下の片隅に設けられた描画コーナーである。副園長によると、「描画コーナーには保育者がいるので、寂しかったり、保育者を独り占めに



写真1 A保育園2歳児の描画コーナー



写真2 0-1歳児の描画

したい時に、子どもは来ることが多い」と言う。A保育園の描画コーナーは子どもと保育者の1対1の関係が保障される場所である。写真1の子どもの左手後方に保育者がたたずんでいる。

〈場面1 赤ちゃんが挑戦する自由画の「教育的」意味〉

「絵を見る会」は、一月に一回保育終了後の18時から20時の間、二つの保育室の仕切りを取り外して床一面に子どもの自由画を並べて行なわれる。写真2のように、0-1歳児の自由画を並べて会は始まる。その日の「絵を見る会」では、初めて参加観察する学生のために、園長は次のように話した。

「自由画が一番新しい価値を生み出しやすい、赤ちゃんから挑戦できるということで、これらの絵は全てクリエイティブなものです。赤ちゃんは、絵筆で線を引いてみたり、点を打ってみたりして、試したり実験したりしているんです。」

〈考察1〉

〈場面1〉の考察は、保育カンファレンス「絵を見る会」のなかで、0-1歳児の描画(写真2)を観ながら園長が上記のような発言をした、その内容をめぐって行う。

乳児は、10ヵ月を過ぎた頃から個人差はあるが¹³、つかまり立ちをし伝い歩きができるようになる。大人の模倣をしたり、要求の手さし指さしをするようになる。投足座位が確立し、頭の垂直保持もでき、関節をどの方向へも屈伸・回転できるようになる。自由になった両手に積木などを持って、正面で打ち合わせたり、親指と人さし指で小さな物をつまむようになる。

ヴィゴツキー(1931)は、この時期の子どもについて次のように述べている。

「人間は、道具を使って自分の活動性の範囲を無限に拡げるといって、あらゆる動物を凌駕する。人間の脳と手が、かれの活動性の体系、すなわち行動の可能な領域および形態を、無限に拡げるのである。それゆえ、子どもに可能な行動形態の範囲を決定するという意味において、子どもの発達における決定的モメントとなるのは、道具を自主的に使用し発見する道に歩みだす第一歩である。それは生後一年の末に行われる。」¹⁴

乳児は、お坐りをして上半身を支えることができるようになり腕を回せるようになると、手指で絵筆を握って打ち付けたり振り回すようになる。差し出された紙の上に、偶然、絵筆に含まれた絵の具が軌跡を残すことがある。

安齋¹⁵は、「1歳児は、柔らかな曲線、激しい呼吸が伝わってくるような渦巻き線、ジグザグと蛇行する線、点や放散する線など、いろいろな印をそれは奔放に印しますが、そうした印は、子どもたちが自分のまわりをペンで叩いたり、腕をふりまわしたりして動くときに残る『軌跡』であり、「描く」という特別な目的をもった動作というより、ふだん遊んでいる時とあまりちがわない」行為であると述べている。と同時に、安齋¹⁶は、このアクションとしての「なぐり描き」の段階が、次の段階につながっていくことを指摘している。2歳ぐらいになると「自分の描いた線の上に、ちょっとちがった線を重ねたり、点を叩いて散らせたりします。この重ね描きには、以前のそれと比べて目のコントロールがよく効いているように思われ、「子どものその動作は、手と目と紙の円環運動の中で、紙と身振りとの調節を自分で確かめているようにみえます」と2歳児の目と手の協応が高まることによって、紙と子ども自身との関係に自在さが生まれて来ることを安齋は指摘している¹⁷。

N・スミスは、1歳から11歳までの子どもの絵について「子どもの視覚的イメージの生成とその発達を、子どもの経験という具体的相のもとで明らかに」した¹⁸。N・スミスは、スクリブル(なぐり描き)について次のように述べている。

「子どもは、1歳半であれ、3歳であれ、基本的には同じ方法で絵を描きはじめる。彼らが描きはじめるときには、まず筋肉運動と感覚に焦点があわされる。そして、腕と身体は繰り返し行き来しながら紙のまわりや紙の上をはねまわる。しかし、これらのしぐさによって残された跡一点、筆勢、ジグザグ、そして円形のくもの素状のもの—は、子どもの目にしみ込み、視覚言語となって教育的はたらきをもつようになっていく。」¹⁹

N・スミスは、スクリブル(なぐり描き)の「教育的はたらき」とは、「動きのある線、連続性や方向性をもった線という特徴、色を混ぜると色が変化するという絵の具の特徴、他の空間と区別された紙という空間のあることが初めて子どもの前に現われてくる」という視覚上に訴えかけてくる特徴や変化であると言う²⁰。

ヴィゴツキーは、道具を使って行動の可能な領域と形態を無限に拡げるといって、あらゆる動物を凌駕する人間の人間たる所以があると、『精神発達の理論』の第一章で論じている。その第一歩は「生後一年の末に」

起り、人間の子どもが道具を自主的に独自のやり方で使い始めるところにその契機があると述べている。1歳前後に始まる、絵筆と絵の具と紙という道具を使つての乳児のまるで「挑戦」せずにはいられないと言わんばかりの原初的な身体活動としての「なぐり描き」が、「行動の可能な領域および形態を無限に拡げる」人間の道具使用の始まりの「軌跡」なのである。「なぐり描き」は、「手と目と紙の円環運動の中で」、「子どもの目にしみ込み、視覚言語となって」いく。それは、「教育的はたらき」の始まりであり、「クリエイティヴ」の始まりなのである。

〈場面2 1歳男児の描画に現われた「社会的感受性」について語る保育者たち〉

D保育者「一時期ば一つ描いてた子が、時間をかけてじっくりと、こころあたりは（左側上方をなぞりながら）勢いがあるんですけど、不思議なバランスというか、初めてこの子がこういう絵を描いたんです。」

司会者「この絵を選んだ人が、もうひとりいます。」

C保育者「（ニコニコしながら絵を手に取り）この、（モスグリーンモスグリーンの雲のような形を右手で軽く掴むようになぞりながら）さっきバランスって言ったけど、絵の奥行きがあって、なおかつ、余白とのバランスと、（左上から右上に手のひらをさっと動かして）ここにシュッと出ている、（左側の雲のような固まりを手のひらで示しながら）この自分と、（右上の固まりを指しながら）相手がちょっと出てきているかなって、相手を感じて来てるかなって、それが（左側の雲のような固まりを手のひらを回すようにして上方に動かしながら）躍動的になってきているところ、彼の存在感みたいのところ、自分で感じているみたいところが1歳でもあるかなって思つて、立体感と奥行きと余白のバランスと両方あるかなって思つて選びました。」

〈考察2〉

〈場面2〉の絵（写真3、4）は、1歳8ヵ月の男児の絵である。C保育者の「自分と、相手がちょっと出てきているかな、相手を感じて来てるかな」「彼（男児自身）の存在感みたいのところ、自分で感じているみたいところが1歳でもあるかなって思つて」という説明に、筆者は当初半信半疑であった。しかし、ワロンの「子どもにおける自己身体の運動感覚と視覚像」の中に次のような記述を見つけ、C保育者の描画解釈を理解することができた。

「子どもは、最初、その環境と補完的な関係にあります。というより、むしろ逆に、環境こそが彼を補完するのです。生理的な欲求の満足は言うまでもありませんが、身体的位置や姿勢の変化ですら、初めは他者の手を借りねばなりません。自己受容感覚にかかわる子どもの要求は、運んでくれたり、揺らしてくれたりする養育者の手にゆだねられています。そののち、自分の方から動作ができるようになると、他者は援助者になったり、妨害者になったりします。子どもの色々な運動を流し込み型どつていく鑄型から、きわめてゆつくりと、より客観的な浮き彫り（レリーフ）が出来上がってくるのです。（略）このようにして、目で見てそれに対して準備することと、自己受容感覚的な身体（ペルソナ）の中で自分自身体験することとの間につながりが出来てきます。」²¹

メルロ・ポンティは、ワロンを引用して、生後6ヵ月目から12ヵ月目までの時期における幼児の変容について次のように述べている。

「ワロンによりますと、6ヵ月から12ヵ月の間に、社会性の爆発が見られます。6ヵ月目から7ヵ月目にかけては、幼児が何もしないでただじっと他人を見つめるような行為を止めるということが、確かめられます。この



写真3 D保育者が選んだ1歳8ヵ月児の描画



写真4 C保育者も選んだ1歳8ヵ月児の描画

ころでは、他人を目がける運動が、生後の最初の半年間よりも、4倍も多くなります。したがってこの時期には、対人関係の突然の湧出、量的にも質的にも突然の増大があるわけです。幼児の行為の質それ自体も変わってきます。」²²

安齋が論じたように、描画は「その子が見、聞き、嗅ぎ、味わい、触れるといった一経験のすべてを吸収した身体が、紙の上に残していく身体運動の軌跡」であるならば、写真3の絵は、1歳8カ月の男児が生後6、7カ月ころから五感を通して体験してきた「対人関係」の身体的記憶の「軌跡」ではないだろうか。

写真3の絵を描いている子どもの傍らにいて、「時間をかけてじっくりと」「初めてこの子がこういう絵を描いた」と育ちの変容を心のなかで静かに驚き喜びながら見守った担任D保育者。そして、その子どもの育ちの変容を隣のクラスにいて感じ取っていたC保育者も同じ絵を選んだ。C保育者もD保育者も、その男児とは0歳児の時から「補完的な関係」を生成してきた。「自己受容感覚にかかわる子どもの要求」を保育者が受けとめ援助することによって、子どもは身体を通して自分自身と他者を「自己受容感覚的」に「初期における他者との混淆」から「漸次的な分化」の過程を辿っていく。と同時に、保育者も、子どもの「初期における他者との混淆」から「漸次的な分化」の体験過程を、「自己受容感覚」的に身体を通して体験しているのである。保育者と子どもとの互いに「自己受容感覚」的に支えられた身体を通した「補完的な関係」の積み重ねがあればこそ、「自分と、相手がちょっと出てきているかな、相手を感じて来てるかな」「彼（自分自身）の存在感みたいところ、自分で感じているみたいところが1歳でもあるかな」という描画を通した感じ取りと読み取りも可能なのかもしれないと理解した。

〈場面3 保育者の向きあい方が子どもの感じ方や意欲に現れることを絵を通して伝える〉

C保育者「絵を受け取る時のGちゃん(20歳代保育士)が、(絵を描いた)子どもの気持ちと一致しないところがあって、でも、大好きなGちゃんが側にいてくれるから、こんな絵を(上の絵、勢いのある緩急のある線で描かれた絵を)描きました。でも、やっぱり受け取り方が、あれなのでこうなりました(下の絵)。同じ赤で描いていながら、これだけ感じが違う。遊びを受けとめるのでも、今(子どもが)登り棒をしている、登れない子がこれだけ登ることができたことをしっかりと認めていったら、ぐっと伸びるのではないかと思います。」

〈考察3〉

諏訪ら²³によると、3歳未満児の「保育の質」が最も顕著に現われるのが「保育者と子どもの関係」であり、なかでも保育者の「よい保育」イメージが集約的に表わされたのは、「保育者の保育姿勢(子どもへの向かい方)」であると言う。

A保育園の描画コーナーでは、子どもが絵を描く時には保育者が傍らに寄り添う。子どもの絵筆の動きに合わせて保育者も心の中で描いているように、筆者は参与観察をしながらそのように感じた。子どもの足の裏から両脚から腹の中から背骨を通過して腕から手指から絵筆に伝わる全身の動きに、傍らに立つ保育者の心身が「調律」する時、子どもは保育者に受容されていると感じるのではないだろうか。その受容感や安心感が、子どもの勢いや力強さや豊かな緩急のある筆致となって紙の上に現われてくるのではないだろうか。保育者の子どもへの向か

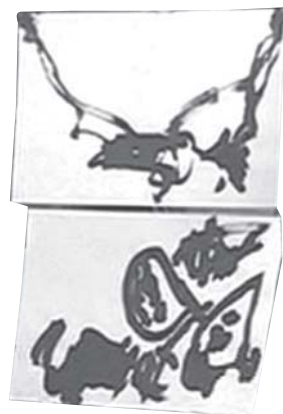


写真5 保育者の向きあい方が子どもの絵に現われる

い方、絵を描く子どもの心身の動きに保育者がうまく合わせるができる時には、つまり「心の拠り所」になるような受け止め方ができる時には、子どもの絵筆は紙の上で自在に縦横に走り、伸びやかな拡がりのある描画の軌跡を残すのではないだろうか。それは、他の保育場面にも「転移」できるとC保育者は言う。

西岡も、「教育の要である『関係』というテーマでC保育者と同じような発言をしている。

「子どもはおとなとの関係の内にしか生きられない。だから子どもの前におとなとして存在することそれ自体が子どもに対して影響力をもつ。おとなはこれに自覚的であることによって、子どもへの働きかけをよりよく方向づけることをめざさねばならない。そのためメルロ＝ポンティは、現時点でのおとなには自覚されていない全身体的な行為が、子どもに意味を読み取られ、影響を与えてしまう事実²⁴に注意をうながし、そうしたレベルでの影響にまでおとなの責任を問う。」²⁴

上記の西岡の発言は、メルロ＝ポンティが1949年から1951年にかけて行ったソルボンヌでの教育学講義をめぐるものである。メルロ＝ポンティの講義は、ワロンの、哲学から精神医学へとすすみ小児診療を続けながら研究活動を行った、その見解を引用しながら展開している。ワロンは人と人との関係は言語の手前にある情動から始まるという見解を主張した。

「生後六ヵ月ころ、すなわち子どもが情動的段階にはいるころになると、たとえ栄養面では申し分のない世話を受けていても、それとともにおとなの心づかいが与えられなければ、子どもは衰弱してしまうのです。心づかいがあれば、母親と子どものあいだで、相互のさまざまなしづきを通して情緒的なやりとりが交わされます。子どもの心的生活への目ざめと、生物学的成長とのあいだのこうした連関は、単なるはね返り現象ではなく、情動そのものの本性を反映しているのです。」²⁵

ワロンは、精神医学やてんかん児の臨床研究が人間研究の出発点のひとつであるため、人間を身体を基盤とした存在として捉えた。そして、子どもは身体の「姿勢-情動の機能」を通して自己内調整を果たすと同時に、「姿勢-情動の機能」を通して他者との交流を果たしていくと論じた。

「はじめは粗野な情動放出であったものが、姿勢による表現システムへと変化し、その姿勢が次第に分化し精妙になっていきます。(略)情動がこのように進化してくると、それは明らかに下位脳の限界を越えてしまいます。皮質、とくに前頭葉の参加がますます必要になってきます。前頭葉は、解剖学的には皮質下の諸中枢と連絡しており、機能的には、主体の精神的人格に関わり、自分の行動について熟慮し社会的要請を考慮する能力と関わっています。」²⁶

乳児は、最も身近な他者である養育者（母親や父親）、そして、担当保育者との身体を基盤とする「姿勢-情動の機能」を通して他者と自己の両方を生き始め、他者（養育者や保育者）による乳児へのていねいな、ゆったりとした、場面に即した、楽しそうな、共感的な「姿勢-情動の機能」を通じた向き合い方の積み重ねによって、「主体の精神的人格に関わり、自分の行動について熟慮し社会的要請を考慮する」人間に成っていく。そのことを、C保育者は、子どもの描画を通じた保育カンファレンスのなかで、若い同僚に伝えようとした。

4. 総合的考察

3歳未満児の描画を通じた保育カンファレンスの観察記録を通して、未満児保育の「養護と教育」や「発達の援助」のあり方、「保育の質」の高め方について考察をすすめてきた。

1) 乳児の心身の育ちと道具使用（描画活動）の教育的意味

〈場面1赤ちゃんが挑戦する自由画の「教育的」意味〉では、園長が0-1歳児の描画（写真2）を観ながら発言した、「自由画が一番新しい価値を生み出しやすい、赤ちゃんから挑戦できるということで、これらの絵は全てクリエイティブなもの」をめぐって考察した。

乳児は、つかまり立ちから伝い歩きができるようになる頃、大人の模倣をしたり、要求の手さし指さしをするようになる。そして、投足座位が確立し、頭の垂直保持もできるようになると、自由になった両手に積木などを持って、正面で打ち合わせたり、親指と人さし指で小さな物をつまむようになる。

ヴィゴツキーは、道具を使って行動の可能な領域と形態を無限に拡げるというところに、あらゆる動物を凌駕する人間の人間たる所以があり、その第一歩は「生後一年の末に」起り、子どもが道具を自主的に独自のやり方

で使い始めるところにその契機があると論じた。1歳前後に始まる、絵筆と絵の具と紙という道具を使つての、乳児のまるで「挑戦」するかのような原初的な身体活動としての「なぐり描き」は、道具使用の始まりの「軌跡」のひとつである。「なぐり描き」は、乳児がそれを繰り返していくうちに「手と目と紙の円環運動の中で」、次第に「子どもの目にしみ込み、視覚言語となつて」いく。それは、「教育的はたらき」の始まりであり、「クリエイティブ」の始まりである。ヴィゴツキーは、「子どもの描画は、児童期における子どもの創造の主要な種類」²⁷であると言ひ、人間の脳と手が、例えば、絵筆と絵の具と紙という道具を使つて、「過去経験の要素から新しい状況や新しい行動を複合化し、創造的に作りかえ、新たに生み出す」²⁸ことを可能にすると論じている。

2) 3歳未満児保育の援助は相互的「自己受容感覚的」な身体を通して行う

〈場面2 1歳男児の描画に現われた「社会的感受性」について語る保育者たち〉では、対象となつた絵（写真3,4）について、C保育者の「自分と、相手がちょっと出てきているかな、相手を感じて来てるかな」という発言をめぐって考察をした。

メルロ・ポンティは、ワロンを引用して、生後6ヵ月目から12ヵ月目までの時期における幼児の「対人関係」の変容、「社会性の爆発」について論じた。描画は「その子が見、聞き、嗅ぎ、味わい、触れるといった一経験のすべてを吸収した身体が、紙の上に残していく身体運動の軌跡」²⁹であれば、写真2の絵は、1歳8ヵ月の男児が生後6,7ヵ月ころから五感を通して経験してきた「対人関係」を記憶した身体の「軌跡」ではないだろうか。

保育者と子どもとの相互的な「自己受容感覚」的に支えられた身体を通した「補完的な関係」の積み重ねがあればこそ、「自分と、相手がちょっと出てきているかな、相手を感じて来てるかな」という感じ取りと読み取りも可能ではないかと筆者は理解した。

3歳未満児保育の発達の援助は、子どもの心身の育ちを、子どもとの身体を通した相互補完的関係のなかで感受し、保育カンファレンスのなかで言語化し、同僚と共有することによって「教育」的にも意味のある援助へと発展していくのではないかと考える。

3) 3歳未満児の「保育の質」の高め方を子どもの絵を通して伝える

A保育園の描画コーナーでは、子どもが絵を描く時には保育者が傍らに寄り添う。子どもの足の裏から両脚から腹の中から背骨を通して腕から手指から絵筆に伝わる全身の動きに、傍らに立つ保育者の心身が「調律」する時、子どもは保育者に受容されていると感じるのではないだろうか。保育者の子どもへの向かい方、絵を描く子どもの心身の動きに保育者がうまく合わせるができる時には、つまり「心の抛り所」になるような受け止め方ができる時には、子どもの絵筆は紙の上で自在に縦横に走り、伸びやかな拡がりのある描画の軌跡を残すのではないだろうか。

乳児は、最も身近な他者である養育者（母親や父親）、そして、担当保育者との身体を基盤とする「姿勢-情動の機能」を通して他者と自己の両方を生き始め、他者（養育者や保育者）による乳児へのていねいな、ゆったりとした、場面に即した、楽しそうな、共感的な「姿勢-情動の機能」を通した向き合い方の積み重ねによって、「主体の精神的人格に関わり、自分の行動について熟慮し社会的要請を考慮する」³⁰人間に成っていく。そのことを、子どもの描画を通した保育カンファレンスのなかで、ベテラン保育者が若い同僚に伝えようとした。それは、保育や教育の要は「関係」にあり、「おとなには自覚されていない全身体的な行為が、影響を与えてしまう事実」³¹を、子どもの描画を通して喚起しているのである。〈場面3〉は、子どもの描画に現われた「具体的保育実践事実」を通して、保育カンファレンスのなかで、「保育の質」を高めようとしている場面であると考えられる。

今後の課題は、「3歳未満児の描画を通した保育カンファレンス」のなかで述べられた「想起」や「語り」や「解釈」が、同僚の保育者にどのような「省察」を促しているのかについて検討していきたい。

註

1 「告示化は、社会がその内容を保育所に果たしてもらうように期待し、また、保育所こそがこの役割を果たすものだということを保証し、担保していることを意味します。」（無藤 隆・民秋 言『ここが変わった！NEW幼稚園教育要領NEW保育所保育指針ガイドブック』、フレーベル館、2008年、75頁）

- 2 厚生労働省「報道発表資料：保育所の状況（平成21年4月1日）等について」2009年9月7日。（<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/09/h0907-2.html>、2013年9月1日情報取得）
- 3 諏訪きぬ・金田利子・土方弘子「3歳未満児の「保育の質」に関する研究【Ⅲ】：保育アイデンティティの形成と保育の質」『日本保育学会大会研究論文集』（49）、1996年、676-677頁。
- 4 森上史朗「カンファレンス」森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典 子どもと保育を見つめるキーワード』ミネルヴァ書房、2000年、194頁。
- 5 浜口順子『保育における理解の発展過程：現象学的保育研究試論』お茶の水女子大学家政学研究所児童学修士論文、1982年。
- 6 津守真「V 省察における理解」『子どもの世界をどう見るか：行為とその意味』日本放送出版会、1987年、183-193頁。
- 7 安斎千鶴子『子どもの絵はなぜ面白いか：お母さんが子どもを理解するために』講談社、1986年、51頁。
- 8 同上、51頁。
- 9 津守、1987年、183-193頁。
- 10 創造美育協会編『創造美育年鑑 年譜と資料』博文社、1978年、50頁。
- 11 「安価という点では、自分で作るのが最も良い。また、絵の具を子どもの前で作って見せることは、日常買ってきたものばかりの中で生活している子どものためにはよい影響を与える」（島崎清海「絵画」島崎清海編『幼児の美術指導』文化書房博文社、1989年、79-81頁）。
- 12 森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典第6版』ミネルヴァ書房、2010年、94頁。
 穴戸健夫・金田利子・茂木俊彦監修『保育小辞典』大月書店、2006年、148頁。
- 13 田中真介監修・乳幼児保育研究会編著『発達がわかれば子どもが見える』ぎょうせい、2009年、43-54頁。
- 14 ヴィゴツキー著・柴田義松訳『精神発達の理論』明治図書、1970年、46頁。
- 15 安斎、1986年、36頁。
- 16 同上、33-34頁。
- 17 同上、39-40頁。
- 18 N・スミス著・上野浩道訳『子どもの絵の美学—イメージの発達と表現の指導—』勁草書房、1996年、186頁。
- 19 同上、12頁。
- 20 同上、12頁。
- 21 浜田寿美男訳編『ワロン/身体・自我・社会：子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界』ミネルヴァ書房、1983年、191-192頁。
- 22 M.メルロ＝ポンティ著・滝浦静雄・木田元共訳「幼児の対人関係」『眼と精神』みすず書房、1966年、170-171頁。
- 23 諏訪・金田・土方、1996年、676-677頁。
- 24 西岡けいこ『教室の生成のために：メルロ＝ポンティとワロンに導かれて』勁草書房、2005年、58頁。
- 25 浜田訳編、1983年、134頁。
- 26 同上、135-136頁。
- 27 ヴィゴツキー、2002年、132頁。
- 28 同上、11-12頁。
- 29 安斎、1986年、51頁。
- 30 浜田訳編、1983年、136頁。
- 31 西岡、2005年、58頁。